
剣星 ～ 剣士の旅 ～

優

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

剣星 ～ 剣士の旅～

【Nコード】

N3500B

【作者名】

優

【あらすじ】

卵から生まれる剣士が中心のファンタジー。剣星：大人はすべて剣士、子供は学校に行き世界の仕組みを勉強する。やがて子供は成人して剣と契約をする。すべては卵から生まれる所から始まる。

プロローグ

剣星^{けんせい}と呼ばれている星がある。

剣星では男も女も成人したら（16歳になったら）剣と契約をしなければならぬ。

成人しているのに剣と契約をしない者は直ちに処刑される。

故に成人している者は全員が剣士となる。

剣と契約をしてからは自由に暮らすことが許される。剣星に潜んでいる魔物を倒すものや、強くなるために他の星に移住する者がいる。

剣星の子供は他の星の子供とは違う特徴がある。子供は特殊な卵から生まれて、生まれた瞬間から言葉を話す事ができる。

特殊な卵とは剣神と呼ばれている者に剣を捧げた時に卵をもらう。

この方法は一年に一回しかできない。

それ以外の方法は、成人している剣星の者が死んだときに自動的に剣神の横に卵が誕生して、1時間後に生まれるという方法。

卵から生まれたら、成人するまでは剣術学校に行き、剣について勉強をする。立派な剣士になるために……

これは、剣星で生まれるある一人の少年の物語である。

第一話・誕生

せまい…

ここはどこだろう？

僕は誰なの？

なんでこんなせまいところにいるの？

「お、動いてるぞ！サラ、来てくれ！」

「本当だ！動いてる！生まれるのかしら？」

卵にひびが入った。

「生まれる！よし、俺の念力で…」

卵が割れて子供が誕生した。

「お、俺の、俺の念力が通じた！」

「何を馬鹿な事言ってるの！それより男の子だよ？」

「そうだな」

誰だろ？この人たち。まあ良いや。聞いてみよう。

「あの、あなた方は誰ですか？」

「おー！しゃべった！俺はガンマ、ちじゅうけん地銃剣を使う剣士だ。」

「わたしはサラ。ファイアーオーシャン火海剣の使い手よ。」

「剣士ですか。で、僕は誰なんですか？」

「君はわたしの火炎剣（ファイアーブレード）と引き替えに誕生させたの。剣神の所に行つて。」

剣神？ 剣と引き替え？ 何を言ってるんだろう？ わかったことは僕は剣と引き替えに卵になって、この人たちに連れてこられた。そして僕は卵から生まれたという事だ。

「まだわからないことだらけなのはわかる。俺たちも始めからこの世界の仕組みを理解していたわけじゃない。まずは学校に行くんだ。そして、世界の仕組み、剣士について。そして自分について勉強してくるんだ。」

「学校…ですか？ わかりました。学校つてどこにあるんですか？」

「学校はこの家から見える。ほら、あそこだ。見えるだろ？ あそこに向かうんだ。」

「わかりました。いろいろ教えてくれてありがとうございます。じやあ行つてきます。」

「おう！ 気を付けていけよ。俺たちは他の星に旅立つ。また縁があったら会えるかもな。」

「まあ、わたし達と会えるのは君が成人したとき以降だから、君の顔がわからないかもね。だから、あなたに名前を付けてあげる。」

そうだな、何にしよう……………

カイト！ カイトに決めた！ もし私たちに会ったらその名前を言つて！ 約束よ？」

カイトは二人にさよならを言つて、学校へ向かつて歩きだした。

第二話 剣術学校

一時間くらい歩いていたら学校に着いた。

着いたけど何処に行けば良いんだろう。

いきなり中に入るのは抵抗がある。

誰かいないかな？

あつ！男の人がいる。話し掛けてみよう。

「あの、この学校に入りたいんですけど…」

「入学希望者ですか。案内します。ついてきてください。」

そう言うと、その人は立ち上がり学校の中に案内してくれた。

廊下の幅は4メートルくらいある。天井までの高さは10メートル以上ある。

廊下の壁を見ると鎧や兜が所々並んでいる

鎧と兜の間には必ず部屋がある。

しばらく歩いていたら小さな部屋に案内された。

「ここに座ってください」

僕は椅子に腰を掛けた。

「はい。ではいくつか質問をさせていただきます。
まず、君の名前は？」

「カイトです」

「どうやって生まれましたか？」

「……よくわからないんですけど剣と引き替えに僕の卵を受け取ったのかなんとか……」

「じゃあ君が今年の神卵しんらんというわけですね。神卵とは一年に一回しか誕生させることができない珍しい卵なんです。そして、カイト君を誕生させたのはサラさんとガンマさんですね」

「……どうしてサラさんとガンマさんの事を知っているんですか？」

「私は昨日の朝、二人が剣神の所に行って剣と引き替えに卵を受け取った所を偶然通りかかったのです。サラさんとガンマさんは有名な方なので人目見ただけでわかりました。それでは質問を終わりにします。カイト君の教室を案内しますのでついてきてください」

そう言つと教室へと案内してくれた。

案内人がドアを開ける。

「おい、タカ先生が来たぞ！」

「入学者が来たつて事だろ？」

「男の子かな？気になる！」

人の話し声が聞こえる。教室の中をそつと覗くと30人くらいいた。

「しずかにしてくれ。入学者を紹介する。……？何をしているんだ？入ってきなさい。」

緊張して足が思うように動かない。僕は足を引きずるようにゆっくり教室に入った。

「今日から新しいクラスメイトになったカイト君だ。カイト君は今年の神卵だ。仲良くしてやってくれよ？それと、一時間目の授業はブレイドレッスン剣学に変わったから準備をしておけよ」

その言葉の後、案内人は教室から出ていった。

僕はあまりの緊張でその場に倒れてしまった。

第三話 自己紹介

目を開けると女の子が座っていた。

「うつ！……………ここは？」

「あ、起きた？ここは保健室だよ。カイト君、だっけ？教室に入ってた途端に倒れちゃうんだもん。びっくりしちゃった。緊張してたの？でもそれはしょうがないよ。あたしだって初めてここに来たときは緊張したもん。ああ、懐かしいなあ。あの頃は何もわからなかったんだよねえ。あたしはここにきて3年だからねえ。早く卒業して剣を片手にいろんな所へ旅に出るのがあたしの夢なの。卒業まであと13年…それと、あたしはシャイン！よろしくね」

よくしゃべる人だな。それになんだか香水臭い。

ヤバイ、気持ち悪くなってきた。

「どうしたの？顔色悪くなってきたよ？先生呼んでこようか？って言ってもあたしは授業さぼってるから無理なんだけどね。水飲む？あのね、保健室の水は冷たくておいしいんだよ！食堂にも水はあるけど絶対この水のほうがおいしいよ！気持ち悪くなった時に飲むと気持ち悪いのが治るっ言ってたから飲んでみなよ」

「あの、シャインさん。香水の臭い」

「何？香水がどうしたって？良い臭いでしょ？これ、あたしのお気に入りになんだ！二つ持ってるから一つあげようか？」

「あの、シャインさんの香水、臭いです」

ボタン！シャインさんは怒って部屋から出ていってしまった。

「はあ、助かった。さて、僕も授業に行かなくちゃ」

部屋から出て適当に歩いているとメガネをかけた人が声をかけてきた。

「君は…たしか新入生のカイト君ですよ？わたしは世界科の教師です。カイト君の授業は剣学でしたよね。案内します」

「あ、ありがとうございます。」

僕は言われるがままについていった。

それにしても学校って広いな。迷子になっちゃいそうだな。

そんなことを考えていると部屋に着いた。

「着いたよ、カイト君。あ、先生！カイト君が起きたので案内しました。あとはよろしくおねがいします。それでは失礼します」

「わかりました。」

じゃあ君たちはカイト君に自己紹介をなさい」

先生が言った瞬間、生徒達が順番に自己紹介を始めた。

自己紹介が終わると同時に授業が終わった。

「カイト、教室まで一緒に一緒に行こうぜ！それと次の授業は月に一回しかやらない地獄の授業なんだ」

「ティーラ君？だっけ？地獄の授業って？」

「おっ！記憶力良いな。そう、俺はティーラ。改めてよろしくな！それで、地獄の授業とは文字通り地獄だ。どこが地獄かと言うと、今年卒業する先輩と真剣勝負をすることなんだ。

先輩は手加減はしない。なぜなら先輩達の卒業試験だからだ。わざわざ後輩を試験の相手にしなくても良いと思うんだけどな」

話をしていると教室に着いた。

「……？僕、頭が悪いからそんなに説明されてもほとんど頭に入らないんだ。ごめんね」

「気にするな！ところで、ずいぶん弱気な口調だな。神卯の人は、ほとんどが生意気でむかつくんだよ。でもカイトは正反对だな。気に入った！じゃあ授業に行こうぜ！地獄の授業を体験したら俺が言ったことは理解できると思うから」

僕はティーラ君の話を聞いて恐くなって足がガタガタと震えた。

これから何が始まるのだろう。

先輩の卒業試験という事はやっぱり強いのだろう。

死んじやうかもしれない。

そんな事を考えて地獄の授業が行われる教室へと足を運んでいった。

第四話 地獄の授業 前編

「着いたぞ。地獄の授業は他の授業とは違って教室ではやらないんだ。ここなら広いから全力で戦えるってわけだ！」

ティーラは楽しそうに話していたが、急に真剣な顔をした。

「あらかじめ言うておくけど勝とうなんて思うなよ！先輩は剣に特殊な能力があるから勝てるはずがないんだ。まあ、これも戦ってみればわかるんだけどな」

「うん、頑張る。それで、ちょっと気になったんだけど、どうすれば勝ち負けが決まるの？」

「良いところに気が付いたな！お前センス良いぞ！勝ち負けはどちらかが動けなくなった時に決まる。動けるか動けないかの判定は先生が判断するから大丈夫だろう。しかし、先輩がものすごい速さで攻撃をしてきて、死んだやつがいるって噂だ。間違っても手は抜くなよ。」

ティーラ君の話を聞いたらすごく緊張してきた。どうしよう。死んだ人もいるって聞いたら余計に怖いよ。逃げたい…

「みんな集まったな！それでは卒業試験を始める。名前が呼ばれたら前に出てきなさい。対戦相手はくじ引きで決める！それでは解散！」

授業が始まってしまった。やばい、緊張がとまらない…助けて…誰か僕を助けて…

放送がなされた

「第一回戦！卒業生ヤイバVSシャイン！両者は前に来てください！他の者は見学！」

シャインってあの香水臭いシャインさん？そういえば同じクラスだった。

見に行こう！

やっぱりシャインさんだ！頑張ってシャインさん！香水の臭いで相手を倒しちゃえ！

こころの中でシャインさんを応援して僕は戦いを見学した。

「女だからって手加減はしないよ。勝たなきゃ卒業できないんだ」

「承知しています。あたしも出来る限り抵抗してみせるから」

「試合開始！」

始まった！卒業生はいきなりシャインさんに斬り掛かった。

シャインさんはかろうじて剣で受けとめた。

その後、剣を器用に扱って卒業生の足を斬った。でも傷口は浅い。少しだけ血がながれている程度だ。

「やるじゃん！さすがは香水のシャイン！攻撃を仕掛けた瞬間に香水を使い、鼻に意識を移らせ、俺の動きを鈍くするとはたいしたもんだよ。だけど、これで終わりだ。」

その瞬間、シャインさんと卒業生のまわりが水に囲まれた。
水のせいで試合がわからない。
今どっちが勝ってるのだろう。

「試合終了！勝者ヤイバ！」

え？シャインさん、負けたの？それよりもどうして判定がでるの？
僕は水のせいで試合がわからなかったのに。
そうか！先生は生徒が死なないように決着をつけたんだ。

いつのまにか水は消えていた。

「香水のシャイン。相性最悪だったね。水は臭いを消すことができるし、香水の臭いは近距離しか効果がない。俺の水は遠距離攻撃だから、君が勝てるはずがないんだよ」

それをみた僕はティーラ君の言っていた特殊な力を理解した。

シャインさんは保健室へと運ばれた。

第五話 地獄の授業 後編（前書き）

多少グロテスクな表現が入ります。苦手な方は読まないでください。

第五話 地獄の授業 後編

シャインさんが負けた後、次々に生徒が保健室へと運ばれた。僕のクラスは33人いる。今、28人目が発表されるところだ。するとティーラ君が僕に声をかけてきた。

「地獄の授業は月に一回と言ったよな。今月は先輩の卒業試験。来月は課外学習。という感じで地獄の授業は行われていく。その中でも先輩の卒業試験が一番つらいんだ。俺たちは普通の剣を使うが先輩達は今年卒業だから16歳なんだ。この世界では16歳から剣と契約をして、特殊な能力を扱うことができる。そして先輩達は16年間この学校で剣の勉強をしているから、当たり前のように強い」

「あの、先輩が強いのはわかったんだけど、どうして僕を恐がらせるの？そんなこと聞いたら僕、本当に死んじゃうかもしれないよ」

「俺は、カイトに死んでもらいたくないから恐がらせ、怯えさせてるんだ。俺がこう言えばカイトは真剣に試合をする。神卵のやつは一番殺されやすいんだ。なぜなら相手が神卵だからだ。卒業生は死んでなければならず一人、神卵がいる。神卵は一年に一回誕生するから年齢別に神卵がいるというわけだ。そして入ったばかりの神卵は容赦なく切り刻まれるだろう。理由は最近わかったんだ。

入ったばかりの神卵は、勉強も何もしていない。この状態でどこまで戦えるのかをテストされるんだ」

「第28回戦！卒業生アルガVSティーラ！両者は前に来てくださーい！他の者は見学！」

放送がながれた。ティーラ君の番だ。

ドキドキしながら試合を見学する。

「試合開始！」

ティーラ君は思いっきり剣を振りかぶって卒業生を斬り付けた。卒業生の体からは血が大量にながれた。

僕はティーラ君が勝ったんじゃないか？と考えていたその時である。卒業生がティーラ君にこう言った。

「君、死んだね。僕の剣、痛分剣（痛み分けブレード）だから」

ティーラ君の体からとてつもない量の血がながれていた。

「試合、終了。勝者アルガ。」

僕は先生の所に走っていった。

「先生、どうしてこんな授業をするのですか？このままじゃティーラ君死んじゃいますよ！卒業試験は違うことをやれば良いじゃないですか！」

「卒業試験は後輩を相手にして、どこまで全力で戦うことができるのかをテストするために重要なことなんだよ。かわいそうに。ティーラ君は死んだよ」

「ティーラ君は死んでません！勝手に殺さないでください！」

「あれを見て御覧。」

先生が指を指した方向に血まみれになって倒れているティーラ君がいた。

僕は全速力でティーラ君のもとへ向かった。

「ティーラ君！起きてよ、お願いだから目を覚ましてよ！嘘だよね

？死んでないよね？

なんで？どうしてティーラ君は目を覚まさないの？

きつと疲れて眠っちゃったんだよね。そうだよ。」

「残念だけどティーラは死んだよ。生きていたら先生が保健室へと運ぶはずだ」

嘘だ。こんなの嘘だよ。

「第29回戦！卒業生ブレイズVSカディン！両者は前に来てください！他の者は見学！」

「ちょっと待つてくださいよ！まだティーラ君が保健室へ運ばれてませんよ！」

「また君か。何度言えばわかるんだ！ティーラは死んだ！」

「僕、この学校辞めます。こんなに厳しいところは僕には向いていません。さよなら」

「退学？良いでしょう。しかし退学するためにはやらなければならないことがありますよ。それは私の選ぶ人と真剣勝負をして、勝つことです。」

「勝てば、勝てば学校を辞められるんですね！わかりました。今すぐ対戦相手を用意してください」

「試合中断！これより退学試験を始める！カイト、前に来てください！対戦相手は私です」

つつい強い強気で退学なんて言っただけ、どうしよう。

でも、ティーラ君が死んだのをなんとも思っていない先生はやっぱり許せない！

「はじめに言っておくけどこの試合でカイト君が負けたら、ティール君のいる天国へ行けるよ。つまり、負けたときはお前は死んでいると言うことだ！さあ、これが君の剣だ。でかいから攻撃力はあるよ」

僕は剣をしようとしたり。

しかし、重すぎて持てない。

僕が剣をしようとしている所を容赦なく攻撃を仕掛けてきた。

鉄の剣が僕の心臓を貫いた。

「どうしました？もう終わりですか？あっけないですね。では、とどめをさしましょう」

先生は剣を僕の心臓を何十回もさした。

僕は、僕は死にたくない。こんな人に殺されるのは嫌だ。

その時、僕の体からまばゆい光が放たれた。

「なんだ、この光は！」

「ずいぶんとえげつない事してくれるじゃん。だが、俺を殺そうなんて100年早いぜ。貴様には俺を殺すことはできない。俺が貴様を殺す。覚悟しろよ」

僕が僕じゃなくなったのはこの時からである。

第六話 正体

「なんで、死なないんだ？何十回も心臓をさしたはずなのに」

「確かに、カイトなら死んでたな。しかし俺はカイトじゃない。さて、死ぬ覚悟はできたか？」

「ふはははははは！お前はまだ生まれたばかりだ！剣の能力は使えない。つまり私には勝てない！行くぞ、爆烈剣！
ばくれつけん

この剣はすさまじい早さで決してやむことのない攻撃。いくらお前でも今度ばかりは終わりだ！
ん？やつはどこに行った？恐くて逃げたのか？」

「見えないのは当たり前だ。俺は透明剣を使っインビジブルブレードたんだからな」

「どこだ！どこにいる！どうして剣に能力があるんだ！お前は誰なんだ！」

「俺は貴様の後ろにいる。剣の能力についてはずいぶん昔に得た。そして俺は、ハレス！ハレスキューエル・ハデスカイウエル」

そして僕は、いや、もう一人の僕は先生を斬り、倒した。

「ハレスキューエル・ハデスカイウエル。12年前、世界征服をしようとした、伝説の悪人。私が勝てるはずがない…是非。是非私をあなた様と一緒に世界征服をさせてください。」

ぐっ！ぐは！どう…して」

「貴様のような雑魚は俺の手下にはいらな^いい。」

そして、先生は死んでしまった。

「永遠に眠れ」

「ウオオオオオオオ！ すごい！ 先生に勝った！」

「ハデス、でしたっけ？ 学校辞めな^いてくださいよ
「悪いな、俺にはやるべきことがある」

「やるべきことってなんですか？」

「もちろん、世界征服だ！」

もう一人の僕は世界征服をしようとしている。僕が止めな^きゃ。た
ぶんハレスキューエル・ハデスカイウエルを止められるのは僕しか
いない

最終話 カイトウルウォール・フリードVSハレスキューエール・ハデスカイウエ

ハレスは学校を出たあと、ロケットが置いてある場所に来た。

そして、ロケットに乗って宇宙へと向かった。

学校を出てから一カ月が過ぎた。

いったいどこに行くのだろう。

その時、ハレスが僕に話し掛けてきた。

「聞こえるか？カイト。俺は今、サラとガンマがいる所へと向かっている。あいつらはこの俺を誕生させておいてさっさと旅立ちやがった。そしてあいつらの剣の能力は使えそうだ。まずはあいつらを手下にする。」

そんなことを僕に言ってどうするんだろう。なにかたくらんでいるのかな？

「カイト、出てこい」

その瞬間僕はハレスの背中から外に出た。

「あの、初めまして。でもどうして僕を出してくれたの？」

「俺には貴様が邪魔なんだよ。伝説の英雄、カイトウルウォール・フリード。貴様は間違いなく12年前、俺の世界征服を阻止したカイトだ。今はまだ記憶は無いみたいだから今のうちに殺してやる！」

ハレスは僕にわけのわからない事を言って僕に切り掛かってきた。

キイイイイイイイン

僕がハレスの攻撃をかわしたらロケットを激しく切り付けていた。

「俺の攻撃をかわしただと？そんなばかな！いいだろう！勝負だ！カイトウルウォール・フリード！俺の剣を一本貸してやる！いくぞ」

「わかった。この勝負、受けて立つよ。ハレスキューエル・ハデスカイウエル！」

「僕が君を止める！」

僕はハレスと互角に戦っていた。自分でも信じられない。でも…なんだかうれしい。

そんなことを考えているとロケットが惑星に到着した。

「おりろ！カイト！ここで決着を付けるぞ！」

そして、ついた惑星で勝負が再開された。

ハレスは透明剣インヒジブルブレードを使わずに戦った。理由はわからないけど

「僕は…僕はハレスキューエル・ハデスカイウエルと共に行く！」

その後、ハレスの動きが止まった。

「共に行く？一緒に世界征服をするということか？」

「違う。一緒にあの世に行こう。僕はカイトウルウォール・フリードだ。今すべてを思い出したよ。僕は12年前、君を倒してからあの世に行った。僕の最後の技を使って一緒にあの世に行ったんだよね。君を倒すにはあれを使うしかなかった。サラさんとガンマさんはあの時と同じ案内役だったんじゃないかな？人気の無いところに

僕達を呼び寄せたんだよ。犠牲を出さないために。僕があれを使えば大変なことになる。そして、サラさんとガンマさんに世界をたくして僕は死んだ。僕達は戦い続ける運命なのかもしれない。行くよ。ハレス」

「やめる〜〜〜!!」

「無理だよ。共にいこう。」

「サラさんガンマさん。世界は任せたよ。
禁断魔法“カタストロフィ”」

「どうしてだ〜！カイトウルウォール・フリード。俺は…永久に不滅だ〜」

僕が放ったカタストロフィは、僕達がいた惑星を丸々消し飛ばした。僕の魂が天国に向かっている時、サラさんとガンマさんを見つけた。先に非難していたのだ。

この世界を頼みます。

サラさん

ガンマさん

ありがとう

そして

さようなら

いつか

僕達が戦うときは

その時はまた

よろしく願います

ここまで読んでくれた皆様。
本当にありがとうございました。

最後に

僕達は

戦い続ける運命なのかもしれません。

永遠に…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3500b/>

剣星 ～ 剣士の旅 ～

2010年10月17日04時41分発行